

## ●奨励賞〔論文概要紹介〕

# 我が国の伝統と文化を 尊重する態度を 育成する授業の創造

熊本県玉名市立岱明中学校 いのうえゆういち  
井上裕一

### 【実践の概要】

本実践では、文化の担い手として、自国の伝統文化に対する誇りを高めることをねらい、社会科の問題解決的な学習と他教科との体験的な活動を効果的に関連させながら取り組んだ実践である。

### 【方法と内容】

#### 1 研究の視点

##### (1) 主体的で対話的な学習活動の工夫

- ア 追究意欲を喚起する教材
- イ 切実感を高める学習課題の設定
- ウ 生徒相互の交流を促す場の工夫

##### (2) 深い学びを促す学習過程の工夫

- ア 問題解決的な学習の充実
- イ 教科横断を図るカリキュラムマネジメント

#### 2 指導の実際

##### (1) 社会科「室町時代の生活文化」の実践

本実践では、室町文化の広まった背景について、問題解決的な学習を通して追究させていく。

室町時代の初期、茶寄合は、京都の会所で武士や貴族、禅僧らの交流を通し、上流階級に広まった。会所は、茶をはじめ、水墨画、連歌、花、香などがたしなまれる場所として発展し、やがて書院造が現れた。中期には、産業が発達し、

生活に余裕が生まれた民衆も茶を飲むようになった。応仁の乱後、地方に戻った武士たちが京都の文化を模倣したことも、文化が広まった背景の一つと考えられる。

そこで、生活経験とのかかわりが強い茶の文化を取り上げ、学習課題「室町時代、上流階級の人々は、ぜいたくな遊びとして会所で茶会を開いていたのに、なぜ、庶民も喫茶を楽しむようになったのだろうか」を設定した。

追究過程では、様々な資料を根拠に、それぞれの仮説を交流するなかで、生産力の向上、ものや人々の交流、民衆の自立という三つの視点から理由を整理していった。

##### (2) 玉名学「伝統文化と茶道」の実践

玉名市では、全ての小中学校で教育課程特例校の指定を受け、義務教育9年間を貫く特色ある教科「玉名学」を新設し、「礼節」「探究」「日本語」のテキストを用いた9年間の計画的・継続的学習を推進している。そのうち「礼節」においては、基本的生活習慣と礼儀作法、公共の精神、人間関係形成力の育成を目指している。

ここでは、4時間扱いで、茶道の成り立ちの追究、ゲストティーチャーとの茶道体験等に取り組んだ。

### 【実践のまとめ】

社会科の学習では、上流階級による会所での喫茶の様子と庶民の「一服一銭」の様子を比較することで、都の文化が農村にまで広まった背景に対する問題意識を高め、追究を深めることができた。

玉名学の学習では、社会科の既習内容をさらに深め、「室町文化が形を変えながら現代に息づいていること」や「他者を大切にす日本の礼儀作法のよさ」について実感することができ、我が国の伝統や文化に対する理解や誇りが高まっていることがうかがえた。

今後は、本単元における地域素材の開発と単元を通じた思考の変容のとらえ方についても研究実践を深めていきたい。

## ●奨励賞【論文概要紹介】

「問題」に着目した数学の  
授業改善に関する一考察

～「推移型の問題」と

「非推移型の問題」の

比較を通して～

北海道旭川市立永山南中学校 やちもとなおき 谷地元直樹

## 【実践の概要】

本研究は、「問題」には修正が行われている問題（推移型）と修正が行われていない問題（非推移型）があることを確認するとともに、推移の根拠を明らかにすることで、数学の授業改善の視点を提案することをねらいとしている。

筆者が18年間実践してきた「授業記録ノート」に着目し、「問題」の構成要素（図、式、数値などと問題文）がどのように推移しているのかを分析・考察した。その結果、「問題」には推移型と非推移型があり、それぞれに根拠が存在していることを明らかにした。

## 【論文の紹介】

## 1 「問題」と「問題の工夫」の意義

「問題解決の授業」における「問題」は、その内容や提示方法によって、問題把握や課題解決に向かう学習過程に大きく影響を与える。そもそも「問題」は、「生徒自らが問いをもち、課題解決への意欲を喚起させることができる」という位置付けにある。

筆者は、「問題の工夫」を授業改善につながる一つの方法と捉えており、これまでの実践研究を基にその意義を次の2点にまとめている。

ア：本時の課題が明確になり、考え合う授業を行うことができる。

イ：数学的活動（予想する活動、比較検討する

活動）を充実することができる。

「問題」の提示方法を分類した先行研究はほとんどない。そこで「決定問題」による提示方法を参考にし、「問題」を作成する上で主な内容となる構成要素を次の二つに分けることにした。

〈問題提示に関わる構成要素〉

$a$ ：提示する「問題」において、対象となる図・式・数値・表・グラフなど。

$\beta$ ：板書もしくは口頭などで伝える問題文。

問題提示において二つの構成要素  $a \cdot \beta$  が、どのように推移しているのかを、具体例を通じて分析・考察していくことにした。

## 2 数学の授業改善の視点

本稿では四つの具体例を取り上げて、推移・非推移の根拠を分析・考察している。例えば、「非推移型の問題」の考察は、次の2点である。

- ・本時のねらいが明確であり、教師の意図に基づいた「問題の工夫」が既に行われている。
- ・「問題」の答えを直観的に予想したり、多様な考え方で解決したりすることができている。

本研究を通じて得ることができた知見から、数学の授業改善の視点を次のように3点にまとめ提案する。

- ① 「推移型の問題」と「非推移型の問題」を把握しておくこと。
- ② 「推移型の問題」を段階的に押さえながら、長期的に授業改善に取り組むこと。
- ③ 構成要素  $a$ （図・数値など）と  $\beta$ （問題文）の双方から「問題」を工夫すること。

## 3 研究のまとめ

筆者のこれまでの授業実践を振り返ると、「推移型の問題」が数多くあることが明らかになった。その多くは本時の目標の達成に向けた「問題」の改善が主な理由であることが確認できた。

授業の良し悪しは、最初に提示する「問題」

に大きく左右される。すべては本時の目標を達成するために、意図的に指導が行われていることを忘れない。

### 【参考文献】

- (1) 相馬一彦・國宗進・二宮裕之. 2016. 『理論×実践で追究する！数学の「よい授業」』. 明治図書.
- (2) 相馬一彦. 1997. 『数学科「問題解決の授業」』. 明治図書.
- (3) 谷地元直樹. 2007. 『問題の工夫に焦点を当てた授業づくり』. 日本数学教育学会誌.